

# 京大広報

No. 51

京都大学広報委員会

## 2月20日の警官立入について

去る2月20日午後2時半頃、病院新病棟の窓ガラス10数枚が投石によって破壊された。このことを病院から川端署に届け出たところ、同日午後4時頃、私服警官2名が現状確認のため、病院事務部長室に来訪後、現場（屋外）におもむいた。現場での調査中、新病棟玄関前で、前記の警官2名が数名の学生に囲まれ、抗議をうけた。その後10数名の学生が同警官2名と共に病院管理棟におもむき、事務部長に事情の説明を求めた。午後5時半頃前記2名の警官は、その後迎えにやってきた10数名の警官と共に帰った。

こえて2月22日夕刻学生部長室に10数名の学生がやってきて、「警察の学内立入りに関して、大学との間にどのような了解が成り立っているかを明らかにせよ」と求めた。紛争以前に、大学と警察との間に成立していた慣行は、その後封鎖解除にあたっての機動隊導入という、異常事態を経過して、相当に変わってきているが、一方一昨年頃の考えを現在にそのまま適用することも問題があるので、この件に関する相互の見解を明らかにしておくことが必要であると考え、2月25日学生部長は川端署長と面会した。その内容は以下のとおりである。

警察側の意向としては「少なくとも医学部および病院は現在なお紛争時に近い状態が残っているので、一昨年の封鎖解除後の警備体制は原則的に継続している」と考える。その点では必ずしも大学の事前了解を得ず、構内立入り（建物は含まない）をすることもあつて考えている。しかし、勿論大学の運営に支障を与えることは避けたいので、大学の意向を尊重して行動するよう心掛けている」

とのことであつた。

これに対し学生部長としては「大学一般の問題として原則は明らかにしておきたい。すなわち事件の起こっているとき、現認、あるいは大学側の通告に基づいて警官が構内にはいる場合、および令状を持って搜索等を行なう場合については学内の受留め方は警察側と著しい食い違いはないが、いわゆる任意捜査に含まれる事態について、警察側の一方的判断で行動することは理解し難い。搜索等時間的緊急性が少くない場合はあらかじめ大学側（管財課が窓口であるが、場合により学生部）に連絡をとり、大学側の確認を得て、その立会のもとに搜索するよう努力すべきである」と主張し、警察側も「従来そのように心掛けてきたつもりだし、今後もその点注意する」と述べ大学側の主張を原則的には了承したと考える。

なお、関連して、警察側から上記の線で行動するとしても土曜午後等時間外には責任者と連絡をとり難い場合が多いので、宿直者、守衛等に十分徹底しておいてほしいとのことであつた。

（学生部）

## 月曜会メモ

第87回（2.22）

司会 森口親司会員

原子炉実験所では、昭和43年から、研究所をより良くするためのあり方に関する検討、討論の場として発足し、継続してきた「原子炉実験所問題懇談会」を本年1月をもって終了し、今後の改革問題は、所員会議で議することになった旨、原子炉実験所の会員より報告があつた。

医学部の会員より次のような報告があつた。文学部闘争委を名のる数名の学生が18日（木）医学部部長室を占拠した。医学部附属病院の新病棟移転

反対が主なる理由である。しかしこの占拠は20日に解かれた。また、20日午後新病棟移転阻止を叫ぶ全共闘系の学生らによって、新病棟のガラスが投石によって破壊された。

これらの報告をめぐって、意見の交換が行なわれた。

つづいて、前回に引き続き、入試制度に関する議題をとりあげた。論点としては、次のような諸点があった。

(1) 入試制度とともに卒業制度(学士という資格を認定し与えること。)と一緒に議論した方がよいのではないか。(2) 入試後の問題として、学生のオリエンテーションやガイダンスをどう考えればよいか。カリキュラムの「自由化」にともなってオリエンテーションは、ますます必要になるのではないか。(3) それが必要だとすると、どのような組織および予算、労力等のわりあてが望ましいか。(4) 受験生に対する大学側からのオリエンテーションも必要ではないか(現在それは、予備校や高校で、主として「合格しやすさ」の観点から行なわれている)。

引き続き次回もこうした問題点を検討することにして散会。

(森口親司会員)

第88回(3.1) 司会 葛西善三郎会員

会員の交替:経済学部菱山泉会員が、本日をもって木原正雄教授に交替する旨の報告があった。

議題:新入生に対するオリエンテーションについて

新入生の目的意識は個人によってはもとより、学部・学科によってもかなり差がある。

新入生の悩みとしては主として次の3点があげられる。

①進路の決定 ②学問内容に対する自分の判断  
③人生論

今回はそのうち、特に①、③について、適切な方向づけを行なうための方策が論じられたが、その主なものは以下のごとくである。

1. 新入生に対し、学部の教授が、それぞれの研究分野を紹介する時間をもつなど、何らかの形で接触を保つことが、一つの目標をあたえる参考となり、現在実施中のところもある。

2. クラス担任制をとり、教養課程の段階においてすでに学部教官がある程度の相談あるいは方向づけに関与している学部もある。

3. 個人的に学部教官と接触を持つことも、有効な方法であるが、一般には簡単には近づけない雰囲気これがこれを阻止している。このような機会をあたえる窓口をつくってはどうか。

4. クラブ活動などにおける学生・卒業生間の上下のつらなりも、その方向づけに大きな役割を果たしている場合もある。

いずれにしても旧制時における大学と異なり、量的な要素を考えに入れざるを得ないが、適切な助言をあたえる方法については、そのカリキュラムの作成や教官自身のあり方をも含め真剣な考慮が必要であらう。

終わりにあたり、ここ当分の間、入学試験、学会等で多忙な時期のため、新学期まで月曜会を休会することにして、次回は4月12日(月)から再開することに決定した。

(葛西善三郎会員、佐々岡啓会員)